

高綱博文編『戦時上海 1937～45年』

村田省一

本書は、日本上海史研究会の共同研究「日中戦争期の上海に関する歴史的研究」の成果である。近年の日中戦争史研究では、軍事史や外交史から、経済、社会、文化史に比重が移りつつあり、特に日本の中国に対する文化的侵略と、中国側の抵抗が大きく取り上げられてきている。また、中国国民政府、中国共産党、そして日本（及び傀儡政権）がそれぞれ支配していた地域の民衆のあり方にも注目されている。本書はこうした最近の日中戦争史研究と近代上海史研究を先導するものと言える。

本書の「総論に代えて」でも述べられているが、本書は故人である古厩忠夫氏の戦時上海史研究を参照するところが多い。古厩氏は戦時上海を考える上で三つの視点を提示した。一つ目は「抗戦力としての上海、民衆」。二つ目は「汪精衛政権」。三つ目は「戦時上海における残留者」である。特に三つ目の視点では、日本の占領下において行政機構や経済機構の末端として日本の支配と関わらざるを得なかった人々が大きな問題となってくる。本書に於いても、こうした「抵抗と協力のはざま」にいた人々についての問題が、ほぼ全章を通じて主要なテーマとなっている。

また、本書の前に発刊された日本上海史研究会編『上海—重層するネットワーク』（汲古書院、2000年）は、発刊時点での日本に於ける近代上海史研究の集大成と言えるものである。この本は主に三つの視点から近代上海史を取り扱った。一つ目は「国際都市」上海と日本・日本人」である。日本の帝国主義政策が「第二の日本」たらしめようとした「満洲」とは対照的に、上海は日本が進出を始めた当初から列強や中国の諸文化、支配が入り交じる「コスモポリタン性」を以て日本の前に表れ、それは日本の敗戦まで残存した。二つ目は、「ネットワーク」である。近代中国に於いては上は企業家から下は労働者に至るまでの諸階層が人的ネットワークを形成し、激動の中国近代史の中で生き残りを図った。近代上海に於いても、こうした人的ネットワークの上に様々な文化伝播、商取引等が展開され、近代上海のダイナミズムを特徴付けた。三つ目は、「地域エリートと「公」領域論」である。中国では国家と社会の中間層である「公」領域に於いて、地域の指導者層が社会の共通利益を達成するために活動していたとされるが、近代化の波にさらわれ、しかも国家が弱体化しているという状況に

直面した清末上海の紳商層は、こうした性格を極めて強く持つに至り、彼らは様々な社団を結成して都市の公的機能の推進に役割を果たした。

これら三つの視点は、現在の日本に於ける近代上海史研究の中で主要なテーマとなっている。そして今回の本書に於いても、これらの視点は主要なものとして引き継がれていると言ってよい。

本書は全三部、11の章から構成される。

I部 「国際都市」上海の支配と変容

高綱博文「日本占領下における「国際都市」上海—日本の上海外国人政策及び外国人居留民の状況」では、これまでの上海市研究がアジア太平洋戦争と勃発と日本による占領により「国際都市」上海は終焉したと見なしており、日本占領下の上海の「国際都市」性については見当を行わず、当時上海に在住していた多数の外国人についても関心を持たなかったとする。その上で、この章では日本軍の上海租界への進駐に伴う上海外国人政策及び外国人居留民の状況について検討し、結果、上海のクレオール性は日本軍の駐屯直後のみならず、上海租界が汪精衛政権に返還された後でも残存し、日本はクレオール性を圧殺して上海を一元的に支配する事に成功したとは言えない、としている。

今井就稔「戦時上海における敵産処理の変遷過程と日中綿業資本」では、上海に於いて日本軍が接收した「敵産」工場の返還問題について、日本軍側の政策の変遷と現地の紡績資本家サイドの反応との相互関係を検討している。この章ではその中で、アジア太平洋戦争勃発以後に於ける日本軍による「新敵産」と「旧敵産」の処理形態の違い、また、租界の占領に伴い中国側資本家は「敵産」の返還に際し日本との妥協を余儀なくされた一方で、権益の拡大を図る在華紡との対立が続いた事を挙げている。

兪慰剛「日本占領下における上海都市管理体制の変遷」では、1937年の「日偽上海市政府」成立以降、日本が上海をいかに支配、管理しようとしたかについて、「偽上海市政府档案」を中心として都市管理システムという側面から検討している。この章ではその中で、「日偽上海市政府」は日本の全面的な監督下であり、租界についても汪精衛政権に返還された事がかえって日本軍の手中に入ったと指摘する一方で、「日偽上海市政府」の組織は簡潔なもので、治安や公共秩序、公共事業の管理に対しては一定の法律条文に基づき管理されていたとし、これらの法律項目のいくつかは今でも現実的な意義を有するとしている。

孫安石「日中戦争期における上海総領事館警察—統制と支配の頂点としての装置」では、上海総領事館警察に特高警察が導入された1930年代と日中戦争期に焦点を当

て、上海総領事館警察の活動についてその変容を検討している。この章ではその中で、日中関係の対立により上海総領事館警察の業務が日本人居留民の保護と取締という本来のものから変質し、特高警察体制の導入、戦闘への直接参加、後方治安担当、共産主義活動に関する情報収集、といったオールマイティな機能を持つ組織へと上海総領事館警察は変容したとしている。

II 戦時上海の都市文化

菊池敏夫「戦時上海の百貨店業と商業文化」では、上海南京路にあった五大百貨店(先施、永安、新新、大新、麗華)について取り上げている。これらの百貨店は日中戦争直前、上海の小売総売上の56%を占め、富裕層や新中間層を主にターゲットとしたこれら百貨店の戦略はものを売る事を新しい商業文化にまで発展させ、南京路は商業文化のセンターになった。この章ではこれら百貨店が日中戦争勃発後は、租界に流入する資金や難民を背景に繁栄し、アジア太平洋戦争以後も日本軍の管理や品不足、インフレなどのマイナス面をうけつつ、独自の経営を模索し続けたとしている。

岩間一弘「戦時上海の聯誼会—娯楽に見る俸給生活者層の組織化と市民性」では、戦時の上海に於いて聯誼会がスポーツや音楽といった「正当な娯楽」を推進し、俸給生活者を組織化する過程を取り上げている。この章では聯誼会の指導者層が日本と汪精衛政権への協力と抵抗の両側面を見せ、聯誼会は愛国精神への共鳴を求める事で権力への間接的な反対を表明した「市民団体」であったとする一方で、聯誼会の活動は俸給生活者の中下層を固定化し、また聯誼会が租界当局や汪精衛政権の協力者の支援を受けて活動した事は、後に聯誼会への評価が変転する要因となった。

邵迎建「上海「孤島」末期及び淪陥時期の話劇(一九四一—一九四五年)—黄佐臨を中心に」では、戦時の日本占領地に於ける日本と中国の「映画戦」を背景に、1941年から45年までの黄佐臨とその活動グループ「苦幹劇団」を中心に、公演の状況や時期等について確認しながら、演目内容、観客の反応、そして上海の話劇の全体像を繋げて考察している。この章では上海の話劇人は「話劇」を通じて日本軍の占領政策に抵抗し、弾圧に苦しめられながらも上質な話劇を上海市民に提供し、「映画戦」に於いて日本側が普及を図る映画を圧倒したとしている。

陳祖恩「日中戦争期における上海日本人学校—戦時徴用から戦時教育まで」では、日本の上海居留民団の経営する教育団体であり、上海日本人社会の重要な構成要素であった上海の日本人学校について取り上げている。この章では日中戦争の間、上海日本人居留民は学校を様々な手段で戦争に参加させるように促し、日本の戦争を支援したとしている。戦争初期に学校建物を軍に提供した事に始まり、「国体観念明徴、国民精神総動員」に参加する中で、学校の目的は軍事教練と勤労報国が主な目的となり、

基礎教育の機能は喪失されてしまった。

Ⅲ 抵抗・協力・グレーゾーン

鈴木将久「対日文化協力者」の声ー陶晶孫を中心として」では、戦時上海の文化構造を、抵抗と協力の二項対立に収斂させることなく、重層的にとらえようと試みている。この章では主に、表面的には日本の文化政策に協力し、水面下では抵抗活動に従事した文学者陶晶孫の事例を取り上げ、彼の多面的活動を可能な限り明らかにし、戦時上海に於けるさまざまな政治勢力の複雑な関係性を問いただしている。その中で陶晶孫のテキストを分析し、ストレートな言語では表現できない時代の緊張感を、屈折した表現を使用して浮かび上がらせた彼の姿勢を確認する事で、当時の上海文化界の政治的緊張感を読み解いている。

小浜正子「日中戦争期上海の難民救済問題」では、日中戦争勃発後4年余りに渡って続いた上海に於ける難民救済を取り上げている。この章では現場で救済活動に当たった民間社団に対して、国民政府がシステム形成や資金提供で主導的な役割を果し、上海の外国勢力や中共地下黨員も協力していたとし、政府に先導されて難民救済を通じた抗日ナショナリズムの下へ社会の組織化が強化された事が、戦時上海社会の一つの特徴であったとしている。アジア太平洋戦争開始後は、経済的、政治的な困難が増したため、難民救済工作は終結を余儀なくされた。

石川照子「日本の大陸政策と上海日本人YWCAー「文化政策」への協力と国際主義」では、日中戦争末期の1944年8月に日本YWCAによって正式にその許可された上海日本人YWCAについて取り上げている。この章では上海日本人YWCAの成立の背景と経緯を通じて、この団体の日本の大陸政策、特に「文化政策」への協力と国際主義との関係を考察している。上海日本人YWCAは戦争協力へと傾きながらも信仰とのほぎまで苦悩し、持ち前の国際主義を通じて日本占領下の女性を救おうとした。一方受け入れ側の中国YWCAは単純に抵抗か協力かといった選択が出来ない中で、上海日本人YWCAへ否定的な反応を示した。

前述したが、本書の主な視点は三つあり、すなわち「国際都市」上海と日本・日本人、「ネットワーク」、「地域エリートと「公」領域論」である。そしてこの三つの視点に共通して、「占領地の人々と対日抵抗と対日協力」という問題が提起されている。いわば前者の三つの視点を縦糸とするならば、後者の問題提起は横糸とする形で、本書の論は織り上げられていると言ってもよい。本書の論を検討する際には、こうした縦糸と横糸の交点を捉える必要があると考える。以下、この三つの交点について、前述した順番をずらしながら愚見を述べる。

まず第一に、「ネットワーク」と「抵抗と協力」の問題についてである。この問題に抵触する章は、主に「日本占領下における「国際都市」上海」、「戦時上海における敵産処理の変遷過程と日中綿業資本」、「戦時上海の百貨店業と商業文化」、「上海「孤島」末期及び淪陥時期の話劇」、「対日文化協力者」の声」の五つの章であると考えられる。「日本占領下における「国際都市」上海」では、アジア太平洋戦争発生後に日本軍が租界に進駐した際、治安行政上の理由から共同租界工部局の英米人職員を相当数そのまま留任させる等、日本軍は租界の「コスモポリタン性」を重視する政策を取った事、後に1943年の租界返還後に日本が上海在住外国人に対し強硬策に転じた際も、ソ連や東欧のドイツ被占領国、フランスの勢力は上海に於いて反枢軸活動を展開し、日本側はこれを抑える術を持たなかった事が指摘される。「戦時上海における敵産処理の変遷過程と日中綿業資本」では、日中戦争勃発後、上海の民族資本家は租界に拠点を移して日本に対抗し、日本の租界進駐により租界内の民族資本の工場が「敵産」として接収された後も、彼らは汪精衛政権や日本の要人と掛け合い、工場資産の改修に努めた事が指摘される。「戦時上海の百貨店業と商業文化」では、租界の百貨店業主が日中戦争勃発後に、租界を拠点に業務拡大に勤しみ、日本の租界進駐後も汪精衛政権に働きかける等の努力を経て、経営の自主管理をある程度回復した事が指摘される。「上海「孤島」末期及び淪陥時期の話劇」では、日本占領下の租界に於いて、話劇グループは日本の統制により逼塞した映画人や地方エリート達と協力し、話劇を隆盛に導いたと指摘する。「対日文化協力者」の声」では、文学者陶晶孫が占領下の上海に於いて、日本の研究機関、日中合同の文学者協会、さらには国民政府や中国共産党とも関係を持ちつつ、時代への皮肉に満ちた文学活動を行っていた事を指摘する。

この問題の中で垣間見えてくるのは、日本の上海占領統治下の中でもなお、様々なネットワークを駆使して生き残り、自己表現を図る政治・経済・文化の各勢力である。戦時上海の中国側、そして外国勢力が提携を図る相手も多様であり、特に民族資本家が提携先として大川周明らの、日本軍の対中国政策に反発する日本側の要人を選んだのは注目に値する。これは戦時上海から発生するネットワークの中に、いわゆるアジア主義に基づく日中間のネットワークが残存していたことを暗示する。しかもこのネットワークが経済上の問題を解決する際に利用された事は、日中間をめぐる思想上の問題と、経済上の問題を結びつける鍵の一つになると思われる。さらに注目されるのは、汪精衛政権の存在である。古厩氏も指摘している通り、汪精衛政権が本質的には傀儡政権であり、中国の「救国」を損ねるものであった事は否定できない、しかしながら、今回の問題の中からは、日本の厳しい統制下にありながら中国側の利益を少しでも回復しようと努めていた汪精衛政権の側面が垣間見える。本書を通じて、汪精衛政権については「抵抗と協力のはざま」を考える上でも、検討の余地があると感じられる。

第二に、「地域エリートと「公」領域論」と「抵抗と協力」の問題である。これは第一の問題とも密接に関連する。この問題に主に該当するのは、「日本占領下における上海都市管理体制の変遷」、「戦時上海の聯誼会」、「日中戦争期上海の難民救済問題」の三章であると考えられる。戦時上海に於いて、地域エリート層、あるいは新たに台頭した中間層は「公」領域に於いて地域の利益を図る際、日本の占領政策と関わる事は避けられなかった。そしてその中で、地域の利益を図る社团は一面では日本の占領政策に沿い、一面では国民政府や中国共産党等と連携して「救国」を図るという、難しい選択を迫られた。「日本占領下における上海都市管理体制の変遷」では、日本占領下に於ける上海の都市行政は日本の統制を受け入れつつ、組織の改革に努めて行政の効率化を図り、公共秩序や公共事業の維持管理に際しては一定の法律条文に基づき管理を行っていた事を指摘する。「戦時上海の聯誼会」では、俸給生活者層により福利厚生のために結成された聯誼会が日本占領下の上海に於いて、日本の統制下にありながら福利厚生事業を進め、さらには地域エリート層や国民政府、中国共産党とも連携して愛国主義の発揚に努めた事が指摘される。「日中戦争期上海の難民救済問題」では、近代上海が培ってきた社团ネットワークが国民政府の指導を受け入れつつ、難民救済を上海社会にそれまでない形で広く、深く浸透させ、さらには「公」領域を抗戦救国イデオロギーへと動員した事が指摘された。

この問題で特に注目されるのが、戦時上海に於いて地域の利益を達成する「公」領域が、国民政府や中国共産党等との結びつきを通じて、抗戦愛国イデオロギーを発揚する場へととなった事である。特に「戦時上海の聯誼会」、「日中戦争期上海の難民救済問題」はこの点を明らかにしている。この事はさらに二つの面から考えられる。一つは、日本の占領を経て危機にあった上海の「公」領域が、抗戦救国イデオロギーの発揚を通じて己の意義を再定義し、強化へと導いた点である。もう一つは、「公」領域が国民政府や中国共産党等の動員を受けることを通じて、国家、全体の利益を前にして「個」の利益を埋没させてしまう可能性を孕んでいる点である。（近代上海の「公」領域に於ける全体と個の問題については、扱う時期がややずれるが、吉澤誠一郎「批評・紹介 小濱正子著『近代上海の公共性と国家』『東洋史研究』60-2、2001年を参照。）そういった点からも、戦時上海に於ける「公」領域、社团の研究は、戦後史を視野に入れた更なる検討が期待される。

最後に、日本の占領政策という形で「国際都市」上海に参加した日本・日本人と、日本の占領政策に対して抵抗と協力のはざまにいた上海の中国人との関係であるが、この点については、愚見であるが解明出来た点がやや薄かったのではないかと思われる。本書の中で上海日本人社会を主体として取り上げているのは「日中戦争期における上海総領事館警察」、「日中戦争期における上海日本人学校」、「日本の大陸政策と上海日本人YWCA」の3章であると思われる。この内、「日中戦争期における上海総領事

館警察」は戦前戦中の上海総領事館の活動の変遷について、「日中戦争期における上海日本人学校」は上海日本人学校が戦争協力体制に取り込まれていく過程について、「日本の大陸政策と上海日本人YWCA」は上海日本人YWCAの成立意義とその限界について、詳細な考察を行っている。この中で戦時上海に於ける上海日本人社会の性格の一端が明らかにされた意義は大きい。しかしここでは主体である上海日本人社会側に対して、客体である中国側の検討についてはあまり触れられず、結果としてこれらの団体、ひいては上海日本人社会が戦時上海に於いて中国社会側とどういった相互関係を有したかについて、少し見えづらいという感想を持った。但しこの問題は、戦前の上海日本人社会が持ち合わせていた性格とも密接な関係がある。

「上海組は行ったり来たりをくり返して、用あり気な顔をしながら、なにもせず半生を送る人間が多かった。上海の泥水が身に染み込むと、日本にかえってきても窮屈でおちつかないのだ。」

「上海はひとりものが姿を消して、一年二年ほどぼりをさましにゆくところだった。」
(金子光晴『どくろ杯』中央公論社、1971。また、『上海—重層するネットワーク』pp4-6.)

ここにあるように、戦前の上海日本人社会にはどこか、現地に定住して根付くといった傾向とはまた違った傾向も見られた。(無論、上海日本人社会の全てに当てはまるわけではない。)例えば戦前の上海で日本人が特に多く住んでいた虹口地域は閘北地域に隣接しているが、この閘北地域は清末から民国期にかけて紳商層による自治運動、辛亥革命、都市発展、そして上海事変といった、近代上海史の中でも特に激動を体現した地域である。しかし、隣接する上海日本人社会がどういうあり方であったか、そして特に現地中国社会とはどういう関係にあったかについては、明らかにされている部分は未だに多くないと思われる。こうした点は、今後の近代上海史研究の課題の一つだと思われる。

最後に総括すると、本書は戦時上海という、上海の中国社会が「抵抗と協力のはざま」という過酷な状況に置かれた中で、自らをどう方向付けようとしたかについて、また上海日本人社会がどう変容したかについて、従来の視点をさらに発展させて論じ、相当な成果を挙げた書であると言える。(研文出版、2005年4月、404p、6500円+税)

(むらた しょういち・神戸大学大学院)